

ホームページ <http://www.cpi-mate.gr.jp> URL English <http://cpimate.com>

日本国内で、C.P.I.の活動に関心をもつ仲間が増えていきます

————— 教育里親への参加まであと一歩の方々は、大勢おられます —————

本年 10 月の日本インドネシア市民友好フェスティバル会場で教育支援セミナー（講師：C.P.I.小西会長）



国別フェスティバルで教育支援に係るセミナーが行われたのは、初の試み。フェイスブックで戴いた、参加された方の声を紹介させて戴きます。

「小西さんのお話を、初めて聞きました。子どもの貧困は日本でも社会問題になっている昨今ですが、義務教育すら全うできない国があるという現実には驚くばかりでした。そして、自分なりに役立てることがあると教えられました。」(大江)
「私も小西さんのセミナーでいろいろ考えてしまいました。」(岩田)
「お勉強して、あと美食もできて、充実デイでしたね。」(安部)
皆さん、ご参加ありがとうございました。



インドネシア内日本人向け・ジャカルタ新聞 2015 10 18 版



NHK からの取材がありました。日本国内および相手国内で C.P.I.に対する協力・応援は確実に増えています

現地の大学と C.P.I.の連携が、 奨学生卒業生会の協力も得て 進んでいます



本年3月20日から22日、C.P.I.が設立に関与した西ジャワ州チアンジュールの薬剤師養成高校の校舎を使って、奨学生卒業生・各地代表者会議が開催され、ジャワ島8地域から32名が集まりました。

奨学生卒業生としての活動を協議するために集まった彼らは、代表者、会計責任者、全国の卒業生へのインターネットによるコミュニケーションの場への呼びかけ担当、広報担当、事業担当など組織化を行い、本年の計画に取り組みました。

…と、ここまでは平成26年度の事業報告でお伝えしたことです。

ところで、この会議のあと、バンドン工科大学のウェンテン教授の研究室と連携した水浄化装置による、

東ジャワ州の小学校飲料水改善事業の完成が、奨学生卒業生会の SNS (インターネット情報ページ) で伝わりました。奨学生卒業生のひとりが関わっていたからです。

それに啓発されてでしょうか、南スラウェシの政府機関に勤務する卒業生からも、2014 年のモハマディア大学と C.P.I.との連携によるコミュニティカレッジの話題を掲載した新聞記事が、同じく SNS に寄せられました。

政府機関や大学との連携提案が続々と

その勢いで、奨学生卒業生たちから、自分の勤務する政府機関や大学との連携に協力できるとの有難い提案が続々と来ています。

これを、一過性の動きにせず、可能なかぎり情報交換を続け、日本の方々とのマッチングに繋がたいと考えています。

マッチングは、社会活動だけに限る必要はないと思います。技術移転や、技術協力により、日本ーインドネシアの協働で新たな生産活動の可能性をつくることも、社会に役立つことなら繋いでいきたいと考えています。

南スラウェシ州マカッサル市の
モハマディア大学 (UNISMUH)
との連携活動 (協定に結んでいる)

P3~
P5

西ジャワ州バンドン市のバンドン
工科大学 (ITB) ウェンテン教授研
究室との協力活動

P6~
P7

漁村への教育開発のこれから

インドネシアは「海の国」と呼ばれ、約 18,000 余りの島々と周囲の海を含んだ共和国です。主な島は、ジャワ島、スマトラ島、カリマンタン島（西部の一部はマレーシア領です）、スラウェシ島、イリヤンジャヤ島（東部はパルアニューギニア領です）、リゾートで知られるバリ島もそのひとつです（ジャワ島の東側にあります）。

C.P.I.は、1989 年に奨学金支援を始め、現地の教育組織とともに 1993 年に PPKIJ という現地組織の設立を行って以来、主にジャワ島で活動してきました。

2007 年に国際 NGO として現地外務省への登録を行い、中央政府と地方政府からの協力を得やすくなり、貧困な地域の子どもたちの生活向上を図るために、教育支援に加えて、教育開発を進めてきました。自立支援のための能力を高める仕事です。

2011 年、南スラウェシ州の UNISMUH（モハマディア大学マカッサル）副学長とインドネシア政府高官および教育省との会談の場で漁村コミュニティの教育開発を依頼され、同大学と、海洋資源保護教育を行うコミュニティカレッジに係る協定を行い、連携に入りました。

2014 年 9 月以降は、組合&中小企業省が他省庁および地方政府の間を円滑にする役割を担って下さっています。右の地図の第1目標地では、ひとまず学校建設を完成させ、現在第2目標地に取り掛かっています。



ジャワ島の北東にあるスラウェシ島

以下の2つの
郡で活動に
取り組んでいます

第2目標地
タカラール郡

第1目標地
パンカプ郡



教育は、課題を解決する道を示すことができる。でも、その道は険しい。

この写真は、2013 年 5 月に竣工し、2015年7月に生徒数160名を超えた、南スラウェシ州パンカプ郡のコミュニティカレッジです。UNISMUH との連携と日本大使館の無償資金で実現をみた、持続的資源管理型漁業を中学生の段階で教える初めての試みです。漁民人口6割以上を設立の

対象地域として適正とみなした、この特色ある中学校で、島の小学校を出た生徒のほとんどが学ぶようになりました。その年令の青年が未来に希望を持つ第一歩となったのです。



中学校を置いた島の周辺の小さい島々の生徒たちは、コミュニティ舟（無料）で通学しています。

彼らは必ず、自分たちの生活を、180度変える技術を学びたいと望むようになるでしょう。なぜなら、彼らが学ぶテキストに『持続的資源管理型の漁業こそが、漁村の生活を向上させる道である』と書いてあるからです。でも、その道は険しいものです。彼らがその道の実現に挑むとき、もし手を貸せるとしたら、どのような方法があるでしょうか。上記の問いに係るヒントを、考えてみました。



日本の漁業関係者も心配する、東インドネシアの漁業事情。

最近のニュースで、ASFI というマグロ缶詰の会社が、インドネシアで買い取った漁業会社の名義で、同国の排他的漁業水域 (FEZ と呼称する) で、2016 年に30,000トンものマグロ水揚げができる漁業権を取得したとのことです。このニュースに接した日本の漁業関係者は大変に危惧しておられました。30,000トンともなると、まだ成育途上にあるマグロも獲ることになる恐れがあるからです。

根本的な課題は、いまの今まで、こうした乱獲につながる漁業のあり方を検討する知識と、漁獲の評価＝漁獲した数＝出来高収入というのが当たり前

になっている社会に「NO！」を発する交渉能力および新たな評価基準を提案する実績が、実際に影響をうける漁村の側に備わっていないことです。

ここに、教育開発の要点があります。

つまり、できるかぎり魚に傷をつけずに獲り、獲った魚を新鮮な状態でマーケットに搬入するプロセス、搬入から販売までの鮮度を守るプロセス、利益の分配の仕方、漁具や漁船の買入れや修理など、漁獲の質に係る能力の向上が大切です。世界中の漁場から美味しい魚を仕入れたい日本人としては、他国のことながら積極的に取組んでよい課題ではないでしょうか。

本気で漁村の向上を目指す若者たちは、持続的資源管理型漁業に賛成だ。

2014 年9月に、第一目標地で完成させたパンカプ郡のコミュニティカレッジ(中学校形態)に資金を提供した日本大使館の担当者が来られて、モニタリングが行われました。



その当時は未だ少なかった生徒数が充実して活発となった今を、またご覧戴きたく思います。

若年層への教育成果は早くも出ており、島の漁師たちの向上のために、漁業組合を結成させようとの気運があがっています。インドネシア政府に係る能力開発を漁業に関して行う場合、これまで地方政府を通してしか提

供されなかった資金が、出処の省庁から、各州・各市・各郡の出先機関(DINAS と呼称する)を通して漁業組合に直接提供されると、政策が大改革されたからです。第2目標地のタカラール郡では、漁村向上を目指す訓練プログラムなどの計画を立てようとの若いエネルギーが満ちているのを感じました。

日本の伝統的一本釣り漁には、資源管理型漁業の精神が息づいている。日本の漁師だけが、その漁の技術と精神を教えることができる。



この二枚の写真は yahoo の「一本釣り image 集」から拝借しました

世界的に、日本のマグロ漁獲量を制限しようとする動きがありますが、残念で悔しいことです。実は日本こそが、持続的資源管理型漁業の精神が伝統的に息づいているからです。このことを

世界中に知らせるためにも、マグロの一本釣り漁を、諸外国の漁師に教えて、同じ精神をもつ仲間を増やすことが肝心です。

そこで、上記のタカラール郡の計画との連携を模索中です。

左の絵は、パヤオ(沖縄に多い。特殊なロープを海中深く沈めてプランクトンを発生させ漁礁とする)と一本釣りの組み合わせです。このような漁も、船の上の乗組員全員が、一本釣りの基本技術と心構えがあって、できることです。そのことを解るには、日本で、日本の漁師たちの乗る漁船の上で訓練を行うことが、最もよいと思われます。時期や条件を整えて実施したいものです。

インドネシア政府の海洋漁業省の協力を進めてくれる、教育里子の卒業生

私は Budi M. Ruslan と申します。海洋漁業省に勤めています。C.P.I.からの奨学金を中学から大学卒業まで戴いて、政府の上級官僚試験に合格し、いま頑張って仕事をしております。

私の仕事は、沿岸漁業と島々の経済振興を行うことです。C.P.I.の小西代表が東インドネシアで行おうとされていることと大いに共通するものがあります。



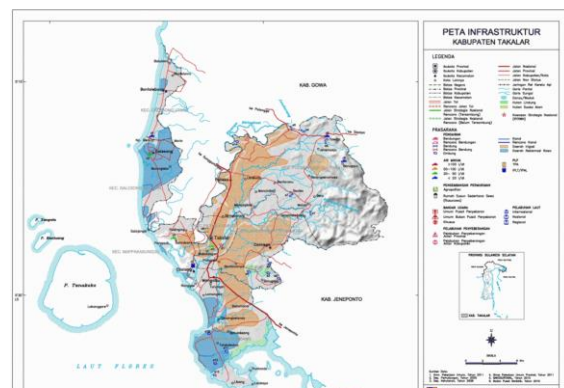
教育里子。奨学生を卒業して、現在は海洋漁業省勤務。係長。今年3月に結成した奨学生卒業生会のリーダーでもある。

小西さんも調査されて理解されたのですが、インドネシアの東にある、漁場の宝庫と言われる地域は、多くの民族が異なる言語をもって生活しており、それを統括して近代的漁業に就かせるのは、並大抵のことではありません。実際にマルク諸島で独立の動きがあったくらいなのです。小西さんは教育プロジェクトを通してその難しさを打破しようとされています。しかも、地元をよく知っている大学と連携されていることは、よいやり方だと思います。

海洋の島々の子どもたちは、例えば C.P.I.が今度、第二目標地域とされているタカラール郡を例に取れば、小学生のうち11ある島すべてに学校があるから通学できます。しかし、中学段階になると僅か2校に減り男の子は誰もいなくなってしまう。自分たちの生活に直接役立つ科目のない中学には、行かないか、または島から出てしまうのです。中学そして高校に通うのは、女子生徒だけです。

一昨年まで、ほぼ隣にあるパンカプ郡の島も同じ状況にありました。ところが、C.P.I.とモハマディア大学(在マカッサル)が、コミュニティカレッジと称する中学校を建てて、二年目で様相を一変させました。いまでは多くの男子生徒が通っているようです。このことは、情報に接したとき、かなり衝撃的でした。「あなたたちに儲かる漁業を教えてあげる」というタイトルで学ばせている新しい科目は、注目に値します。魚の獲り方、船の上での処理、運び方、魚がいなくならないように獲る量を管理する方法など、とても詳しく教えていると聞いています。

私が学生のときから、小西さんにお会いするといつも「自分の生活に馴染むように勉強してください」と言っておられました。その考えが、具体的に発揮されているのが、C.P.I.の漁村教育だと思います。



これは、タカラール郡の地図です。右側はスラウェシ島本土で、左側に大きな島(タナケケ島)と周辺諸島が見えます。本土には、漁業組合が3つあります。以前は3つの漁師グループそれぞれが独自のやり方で獲った魚の利益管理をしていましたが、海洋漁業省がマイクロファイナンス事業を行うに際して組合を設立するよう指導し、いまではいろいろの仕組みが統一されています。今度、C.P.I.がコミュニティカレッジ計画をされているタナケケ島にも、島の漁村としては画期的なことですが、組合ができて、仕組み統一の枠組みに参加するという話で、有難いことです。

C.P.I.の計画では、新しい組合を含んだ4つの組合から漁師リーダーを、まずは一名ずつ選んで、日本の一本釣り漁法を伝授してくださるということです。海洋資源を守りながら儲かる漁業を学ぶことは、彼らの今後を変えるよい機会になるでしょう。

海洋漁業省のスシ大臣は大変積極的な改革を進める方なので、きちんとプレゼンできれば政府予算で「日本に学ぶプロジェクト」を実行できるでしょう。同時に、日本の受入れ側にもよくご理解を戴いてこの有意義な計画を実現できるよう、小西さんに協力を惜しまず一緒に頑張りたいです。

東ジャワの小学校への飲料水浄化装置設置プロジェクトを通じたコミュニティ開発事業

C.P.I.教育文化交流推進委員会は、「学校の生徒に毒水を飲ませるな!」という過激とも思われがちなテーマを掲げて、インドネシア内で飲料水浄化装置の施設プロジェクトを始めました。この事業テーマは、すんなり、インドネシア政府にも受け入れられました。国としても優先的に解決を望む課題のひとつということでしょう。

また、インドネシア国内でも様々におこなわれている水浄化施設の事業に於いて、C.P.I.が取り組んだやり方が嚆矢とされるのは、地域コミュニティを包括する形での維持管理の仕組みを築いたことです。

本来、地域のコミュニティは、自分たちの子どもを学ばせる学校—とくに公立の学校を大切にするものだと思われるでしょうが、インドネシアでは、そうでは

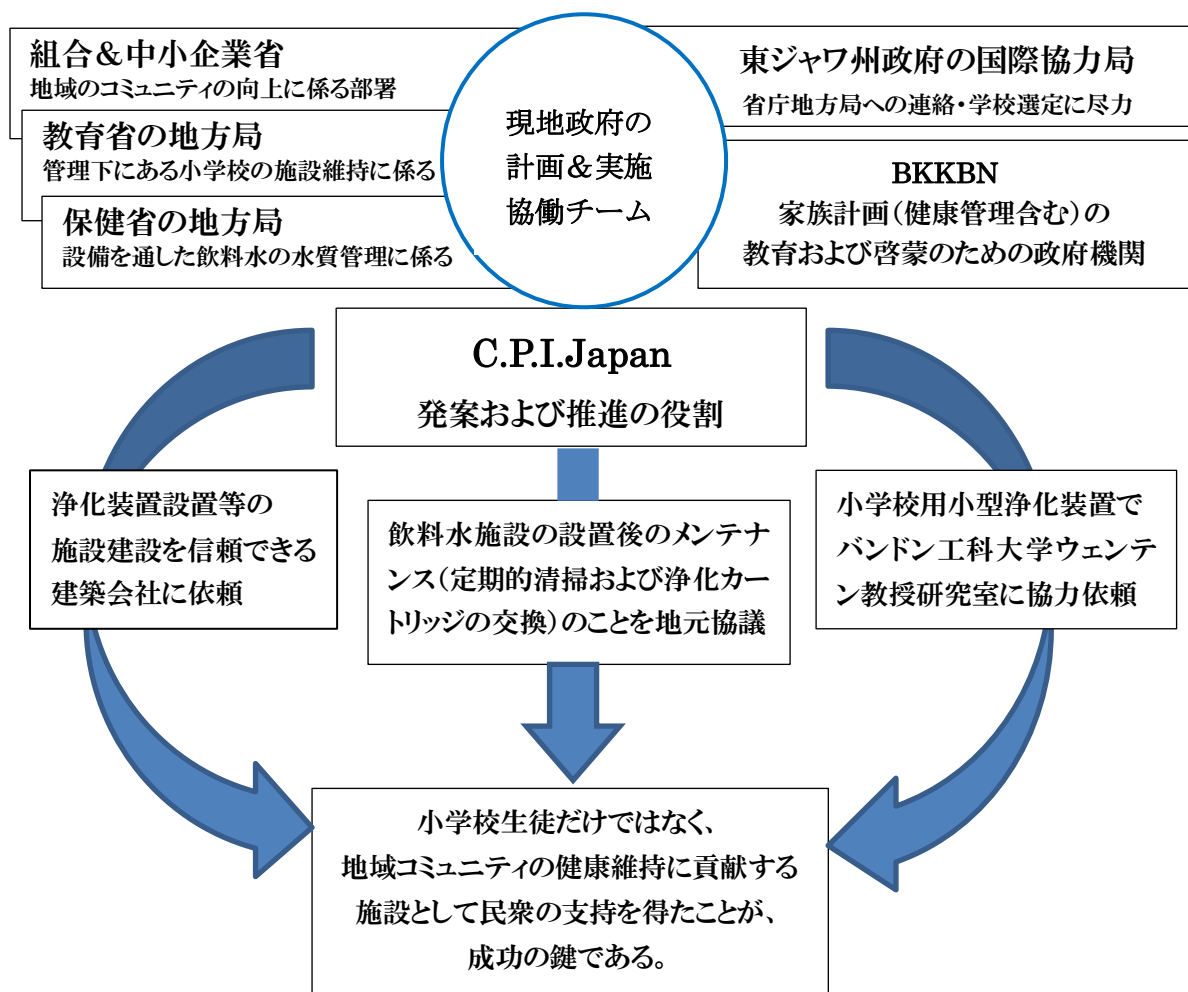
ない場面が多くみられます(設備を壊す、盗む等)。

もちろん、コミュニティリーダーの方々は、「そのような悪しき状況を一扫し、本来あるべき形を取り戻す文化を育てたい」と言われます。今回の事業は、そのようなリーダーの方々と手を組んで、所謂ひとつの文化革命を起こしたところに価値があるということです。

このことについては、インドネシア政府のすべての省庁がご了解された、2014年～2017年のC.P.I.と政府との協働計画書に明記されています。

この施設事業は、一件300万円と小さなものです。

しかし、このプロジェクトによる効果は、波及効果も含めると大きな価値のあるものです。ODAを司っておられる日本政府の皆様、インドネシアに関わりのある企業の皆様には、ぜひ応援を戴きたいところです。



インドネシア製の「水浄化装置」との連携に活躍してくれたのは、バンドン工科大学大学院で学ぶ教育里子の卒業者です

私は、Fajir Sidiq といいます。C.P.I.の小西会長の教育里子です。高校一年のときに運良く奨学生に選ばれました。小西さんが私の教育里親だと、知らされてはいましたが、高校を出るまでは、年に一度の奨学生との語りあい集会に来られるときしか会うことができず、しかも私が人見知りだったので、一度も話したことがありませんでした。

私は化学が好きでしたので、頑張ってバンドン工科大学に入ることになり、有名な大学でしたから、ちょうど巡回に来られていた小西さんに、報告をしました。喜んで戴きましたが、それから2年間は、またあまり話すこともありませんでした。

ところが、3年生のときに、憧れていたウエンテン先生の研究室に出入りできるようになり、嬉しくて、小西さんに知らせました。ウエンテン先生は、英国のロンドンで長年、水浄化ひと筋に研究をされ成果をあげられ、インドネシアへ戻られてからは、研究成果を生かした仕事で活躍されています。例えば、この写真の工場用水浄化装置や船に置く海水浄化装置などで有名です。



その話を小西さんにしたのが、2012 年だったと思います。ちょうどその頃、小西さんと東ジャワ州の国際協力局長が、貧しい地域の公立小学校の飲料水の問題を解決して子供たちの病気を救いたい、という話合いをしておられたと記憶しています。

その当時、いまから思うと恥ずかしいのですが、バンドン工科大学で、右のような簡易浄化装置を小西さんに見てもらいました。すると「申し訳ないが、これは使えない。工場用水の浄化装置を小型にしてミネラルウォーターより美味しい水をつくることはできませんか？これ以上子どもたちが毒水を飲むのを放っておけないです」と言われて、ちょうど出張から帰って来られたウエンテン先生をお引き合わせしました。最初に上に掲げた写真は、そのときのものです。あれは本当に素晴らしい出会いだったのですね。



右の写真は、ウエンテン教授とC.P.I.小西会長です

それからすぐに、先生の研究室と、先生のお弟子さんで水浄化装置の会社を起こした方々で、開発に入りまして、2年ほどの間に納得のいくものが完成して東ジャワで納品できたことは、夢のようです。

この装置は、インドネシアの技術が産んだ、どこの社会にも誇りをもってだせる製品だと思います。

こんなに小さくて、1日に1000リットルの汚水を浄化して美味しい水を供給できるのですから。オープニングのときには生徒たちも地域の人々も思いきり笑顔で、それを見ている私も、嬉しくなっていました。



そうです。ウエンテン先生を小西さんにお引き合わせしたことで、東ジャワ州の施設オープニングに、招待されたのです。私は、このプロジェクトに係ることのできた2年間を、生涯忘れないでしょう。

右端に私。隣は設備技師、中央に地元の郡長さん。

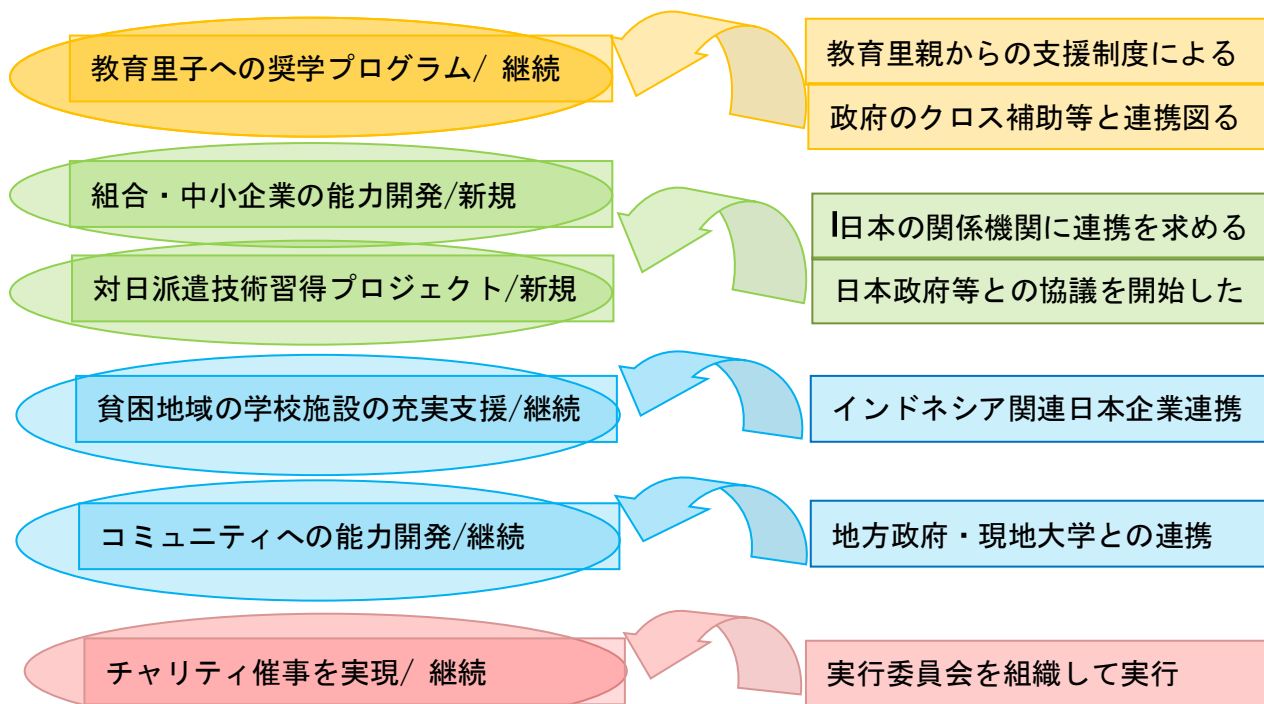


この経験を生かしていきたいです。人々のために、最高のものを適正な価格で提供する腕を磨いて、いい技術者になりたいと決心しています。「あきらめない」ことを小西さんから教わることができました。本当に、C.P.I.の奨学生であってよかったと、心から感じています。ありがとうございました。

2015 年からの体制

ー組合&中小企業省との協力を展開するー

2014 年からの、インドネシア外務省との登録更改にあたり、新政府は、国際 NGO の、カウンターパートを慎重に決めることとなり、2014 年 6 月 25 日に外務省が全省庁を集めて 3 日間の協議が行われました。その結果、青年の自立支援を目標とした教育支援・教育開発を旨とする C.P.I. の直接のカウンターパートは、組合 & 中小企業省となり、2014 年 9 月 6 日に東京で協定書への署名式を行いました。



日本インドネシア市民友好催事を行う



教育支援の地域
ボランティアとの
連携を図る



コミュニティ への教育開発を
行うために、技術や力のある
現地の大学と連携する
(奨学生卒業生会の応援を得る)



教育里子への
奨学事業を日本
の教育里親の支
援金によって行う



日本での能力開発に
係る調査を終え、適切
な実施活動に移行して
いきたい